Osaka Shoin Women's University Repository

石橋忍月研究（一）

嘉部嘉隆

一

石橋忍月は明治二十年一月、『女学雑誌』に「妹と背鏡を読む」を書いて文芸評論家として出発した。[注1] その活躍期は大学卒業の明治二十四年までというのが衆目の一致するところである。[注2] この期間における忍月のはなばなしい活躍は、しかし意外にその活躍に対する評価を伴っていない。明治文学史の嚆矢である大和田建樹の『明治文学史』[注3]には、

氏は独乙派文学家にして批評家を以て自任せり（ママ）其批評は甚だ皮肉的にして厳酷なる代りに公平なりとの評あり。氏は亦啻に批評家たるのみならず。（ママ）其批評眼を基礎として構造せる一種不抜の文学に対する理想あることは疑なし。氏ハ自ら之を健全なるものと信じ。（ママ）進んで之を社会に教へん事を力めしが如く。（ママ）遂に其摸範（ママ）小説なる

露子姫

は世に出でたり。此書果して文学家一般を満足せしめしや否を知らずといへども。（ママ）平凡なる一般社会には余り歓迎せられざりしと聞く。

（以下『露子姫』より約二ページ分引用）

と、比較的くわしい記述がある。これは忍月の活躍期に近い時点で書かれたためと思われ、これに続く文学史では、記述はかなり少なくなる。[注4] 明治三十九年八月発行の高橋淡水著『時代文学史』[注5]、および雑誌『太陽』定期増

Osaka Shoin Women's University Repository

刊「明治史才七篇　文芸史」[注6]にはいずれも忍月の名前は見当たらない。岩城準太郎著『明治文学史』[注7]において、四箇所に評価を伴わない名前だけが見られる。しかし、この四箇所のうち、二箇所は小説家として忍月を取り上げたものである。その後の文学史では漸次記述が増加してゆくように思われる。昭和十一年発行の久松潜一氏による『日本文学評論史　近世最近世篇』[注8]には、独立項目として忍月が扱われるまでになっている。

忍月が正当に評価されるようになったのは、『石橋忍月評論集』の刊行が与って大きいと言える。この評論集の編集と、この集に付された解説とは、忍月の三男である石橋貞吉つまり文芸評論家山本健吉氏によるものだけに、忍月に対する理解や、あるいは資料的な面など、種々の点で行き届いており、その後の忍月論の基礎となったと言えよう。評論家として忍月と併称された内田魯庵には不完全ながらも評論を含む『文芸小品』[注10]が刊行されている。忍月は活躍期がやや早きに過ぎ、しかも短期間であったため、かえって評論集刊行の時期が極めて遅れたわけである。しかし、忍月にしても魯庵にしても、まだ充分に検討されているとは言い難い。そしてまた、それにはそれなりの理由が存在するのである。

忍月の主たる発表機関は『女学雑誌』[注11]『国民之友』[注12]『江湖新聞』『国会』等である。『しがらみ草紙』その他へも発表しているが、比較的少ないようである。これらの雑誌・新聞等が、かなり閲読し難いうえに、忍月の用いたさまざまなペンネーム[注13]が忍月の評論の全貌を把握し難くしていたことも否定できない。さらに忍月が批評の対象としている作品そのものにも、閲読し難いものが多くなっている[注14]。こういう文献的な難関が、忍月の評価を困難にしている原因であろう[注15]。これらの難関は現在でもなお解決されたとは言い難い[注16]。

しかしながら、『石橋忍月評論集』の刊行は、忍月に対する関心を高め、その後いくつかの忍月論が書かれた。その数は必ずしも多くはなく、その上、かえって忍月論の対象が、この評論集に収載されている評論に限定されてしまうという欠点をもたらしてもいる。しかもなお、この『石橋忍月評論集』が、石橋忍月研究の真の出発点と言えるのである。

それでは、この『石橋忍月評論集』刊行以後、忍月研究はどのように進展して行ったであろうか。

Osaka Shoin Women's University Repository

昭和十七年発行の伊藤信吉氏の『作家論』（利根書房）に「石橋忍月」と題する一文が収められており、これが昭和二十年以前の唯一の独立した忍月論と言える。昭和二十年以後では、まず久松潜一氏の「石橋忍月と文学評論――文学評論史考　五」（『国語と国文学』才二十六巻才一号）がある。『日本文学 評論史　近世・最近世篇』を補うような形で論が進められている。[注17] 忍月の評論の弱点を認めながらも、なおその果した役割の大きさを評価しようという態度が表明されている。

次に忍月論としては最もその核心にふれたものとして、谷沢永一氏『石橋忍月の文学意識』（関西大学『国文学』才十四号　昭和三十年六月）がある。谷沢氏は論の対象として「妹と背鏡を読む」「浮雲の褒貶」「藪鶯の細評」等を取り上げ、これらを中心に忍月の評論の弱点を緻密に論証している。ここで谷沢氏は「論理井然」といわれた[注18]忍月の評論が、むしろ具体性を欠いた、場当たり的な気分的な、既成概念にこだわった、前後に脈絡のない思いつきの列挙にすぎないものであることを指摘している。もっとも、谷沢氏の論は諸条件を考えあわせると、やゝきびしきに過ぎると言い得よう。「妹と背鏡を読む」以下が書かれた時には、まだ近代的批評と言えるものが殆ど存在しなかったのであり、「浮雲の褒貶」はまがりなりにも『浮雲』のその後の評価に大きく与って力あったのだから。

このほか、関守次男氏に「石橋忍月の文芸論」（『日本文芸研究』才十一巻才一号　昭和三十四年一月）がある。この論文は、前記谷沢氏の論は参照していないと思われる。「想実論」と、いわゆる「幽玄論争」とを取り上げているが、この論は谷沢氏とは逆に忍月に対して極めて好意的である。[注19] 関守氏はまず「想実論」を分析し、その上で忍月の評論が露伴の作品の理論的な立脚点になったこと、また鷗外が文芸上の理想主義を唱えたことはないとし、ふつう逍遥に鷗外を配しているのはまちがいで、逍遥には忍月を配することができるのではないかと主張している。幽玄論争では、忍月の言い分にもっとよく耳を傾けるべきで、鷗外の論争のための論争と言ってよい議論の表面にばかりまどわされてはならないとしている。

『国文学　解釈と教材の研究』才六巻才十一号所載野村喬氏の「石橋忍月と内田不知庵」は、忍月と不知庵を

Osaka Shoin Women's University Repository

比較して不知庵をより高く評価し、忍月の評論の欠陥を指摘するとともに、当時のジャーナリズムと忍月・不知庵とのかかわり合いを述べている点に特色が見られる。[注20]

忍月の文芸評論に対する評価は以上に過ぎない。

忍月の伝記に関しては、当然のことながらまだまだ不明の部分が多い。その不明の部分の一部である金沢時代を取り上げたものに藤田福夫氏の「石橋忍月の金沢時代」（『文学・語学』才二十四号　昭和三十七年六月）があり、これは忍月の伝記研究としては最も早いものであろう。全体にわたって、比較的調査の行きとどいているのは、昭和女子大学『近代文学研究叢書』才二十四巻中の「石橋忍月」であるが、これとても細部にわたれば不明な部分や不満な点が多い。その後、山本健吉氏が再三にわたり伝記上の問題点を取り上げ、[注21]少しずつながら、解明されつつあるというのが現状である。

二

内田魯庵によれば、「レッシングを日本に紹介したのは忍月が初めてで、矢鱈とラオクーンを引張出すのでレッシング忍月の諢名があつた」[注22]ということである。たしかに、忍月の最初の評論である「妹と背鏡を読む」にも、

彼の独乙のレッシング氏の「ミンナ、フホン、バルムヘルム」は、世人の尤も重ぜざる所のコンメヂエなり。然りと雖も、一箇の士官、一箇の貴女、一箇の仏人を仮り来りて、以て普魯亜、ザクセン、仏蘭西三国の関係を寓写し、巧に当時を諷するが故に、最も世人に賞読せらる。

と、レッシングが出て来る。しかしその後しばらくはレッシングの名は出て来ない。「浮雲才二篇の褒貶」には「シルレル」「アリストテレス」が現われ、「薮鶯の細評」には「アリストフアネス」「プラテン」「グツコー」「ゲーテー」「シセキスピール」等の名が見られる。その上、『国民之友』に「ゲエテー論」[注23]が書かれるなど、明治二十一年まではレッシングはあまり出て来ないのである。『石橋忍月評論集』全体をながめても、レッ

Osaka Shoin Women's University Repository

シングがそれほど大きな役割をになっているとは考えられない。むしろ鷗外におけるハルトマンの方がよほど役割は大きい。

忍月がさかんに外国の文学者の名前を持ち出して論を展開しているので、忍月の文学観はこれら外国文学から形成されたと考えられがちであるが、必ずしもそうとばかりは言えない一面を持っているのである。

忍月の立論のかなり重要な部分は、坪内逍遥の『小説神髄』の影響が大きい。「妹と背鏡を読む」においても、

小説は素と人情を穿つを以て主とすれば、寓意諷誡を要せざるが如しと雖も

と、明らかに「小説の主脳は人情なり」という『小説神髄』の章句を踏襲しているし、「寓意」「諷誡」[注24]などということばも『小説神髄』において説明されていることばである。また、忍月の評論の特色ともいえる人物論は、『小説神髄』中の「主人公の設置」の影響が見られる。「薮鶯の細評」では、

薮鶯には主人公なし。主人公とは何ぞや、曰く、全篇を支配し、全篇を構造する所の人物なり。（傍点原文のまま）

と言っているが、『小説神髄』には「主人公とは何ぞや。小説中の眼目となる人物是れなり。（中略）主人公欠けたらむには、彼の小説にて必要なる脈絡通徹といふ事をばほと〳〵行ふを得ざればなり」とあってよく似ている。もっとも、人物論に関しては、忍月は『小説神髄』よりすぐれた見解を出している。「妹と背鏡を読む」では、

奇妙の人物は、千人中一二しか顕れざるものなり。千人中一二しか顕れざる人物は、著書をして奇巧ならしむると雖も、然かも他事に推及するの効なし。

と言い、「浮雲の褒貶」では、

浮雲の著者は小説を知る故に、故意に平凡なる不完全の人物を以て主人公となし、強ひて廉潔優美の人物を作らざるなり。

Osaka Shoin Women's University Repository

と言い、あるいは、

浮雲は平凡なる不完全なる人物を以つて、主人公となし、彼の近世専ら流行する政治小説一名英雄小説の如く、ナポレオン、ワシントンも三舎を避くると言ふ可き文武兼備の俊傑が天下国家を経営するが如き、愉快なる脚色に非らざればなり。昨日下宿屋楼上に煎豆をかじつて、政を評し官を罵りたる貧措大が、今日一蹴して国会議場に現はれ、再蹴して大宰相となり、終に某伯爵の令嬢と赤縄を結ぶが如き、目出度き夢物語に非らざればなり。

とも言う。いわば「典型」に近い考え方が示されていると言えよう。あるいはこのあたりに若干、外国文学からの影響も考えられるかもしれない。しかし、忍月の人物論には限界があった。同じ「浮雲の褒貶」では、

浮雲中才一の欠点は、女を男となし、男を女となしたること、即ち女子の有する性質意想は女子に無くして男子に在り、男子の有する性質意想は男子に無くして女子に在ること是れなり。(中略) 凡て小心、緻密、不決断、柔優、敏捷、陰蔽等の性質は多くは女子に有りて、淡白、潔清、剛粗、短慮等の性質は男子に多し。

今浮雲を見るに、男子に多き性質は尽く女子の専有となり、女子に多き性質も亦尽く男子の専有となる。

と言っていることからわかるように、あくまで既成概念から抜け出してはいないのである。従って『小説神髄』よりすぐれた見解を出しているのは、一種の付焼刃によるものと考えてさしつかえあるまい。この点については続稿において述べる予定である。

『小説神髄』では、複数の主人公の例として「一部の中に夥多の男本尊を設くる事あり。『八犬伝』、『巡島記』、『大内十杉伝』、『尼子九牛士伝』並びに『水滸伝』等是れなり」と書いているが、忍月も「薮鶯の細評」中の、主人公に関する論の中で「数人を以つて主人公となす時は、八犬伝の八犬士に於けるが如く、」と、逍遥の用例をそのまま持ち込んでいるのである。このように見てゆくと忍月の文学観の基礎には『小説神髄』が色濃く影を落していることは否定できないであろう。しかし、忍月の文学観には、もっと根強く残っている戯作的な文学観があつたこともまた見て取れるのである。

Osaka Shoin Women's University Repository

忍月が、その最初に世に問う評論の対象として、坪内逍遥の『妹と背鏡』を取り上げたのは、それなりに理由のあったことと思われる。(注25)「妹と背鏡を読む」は、まずその書き出しが、

日本小説改良家の親玉春のや朧氏（実は文学士坪内雄蔵）の戯作に係る妹と背鏡は（後略）（傍点――嘉部）

というような戯文調になつている。こういう戯文調が出て来るのは、比較的初期の評論に多いのであるが、このような文体を用いること、あるいは、「戯作」と評者の称する作品を批評の対象として取り上げることが、すでに「日本未曽有のトラゲデエを編成されしは」という、ヨーロッパ的な文学観の導入によってする批評の態度とはくいちがっているのである。あるいはまた、忍月が文章をほめる場合に、「一句千金」「一行千金」などということばをよく使っている。極めて抽象的な賞詞であるとともに、硯友社的な発想(注26)でもあると言える。このような古めかしい文学観が、忍月の評論にはかなり見られる。それは、逍遥の文学観で外装し、さらにヨーロッパの文学観を導入してもなお拭いきれない忍月自身の身についた文学観であったのであろう。文学観のみならず、柔軟性を欠く忍月の思考はあちこちに見出されるのである。「妹と背鏡を読む」の中でも、

女子師範学校は女子高等の教育を授く、故に同校卒業生某女は高等の教育ある事を知り得可し。又明治内閣は善良の政を施すと云はば、其内閣を組織する所の分子なる某大臣も亦た善良の人たるを知るなり。（中略）お雪は女子師範学校を卒業したる立派の淑女なり。結婚は生涯の大事たることを知りたるに相違なし。（中略）お雪は既に作者も許す如く、高等の教育ある者なり。一生を託す可き男と託す可からざる男との気質志操を、真に選み分け得る者なり。両親に向て其利害得失を説き能はざるは、理に於て無きことなり。苟も此の如き教育ある人にして、斯程に利害の判然たるを知り乍ら、自ら甘んじて、否な忍んで其害を採るとは、叉手〳〵奇妙の人物かな。忍は信ず、苟も女子師範学校を卒業したる淑女方にして、斯る一生の苦となり、禍となることを排除するを知ざる人は之れ無しと。

というような杓子定規ともいえる記述が見られるのである。

ドイツ文学に接するまでの、忍月の文学的教養については、彼の経歴とその評論にあらわれた記述から逆に推

Osaka Shoin Women's University Repository

察するしかない。(注27) 年譜(注28)によれば、「少年時代久留米の江崎済（号、巽苔）の漢学塾に学んだ」「明治十六年　儒者山田奠南の家の書生になる」となっている。(注29) 当時の知識人の常として、やはり根底にあるのは儒学の教養のようである。そしてまたその上に漢文学の教養である。極く通俗的な知識をふりまわし、「昔し鴻門の会樊噲項羽を罵る千古の快絶と称す」（「葉末集」）「安子順なるなるもの曽つて曰く、諸葛孔明出師表を読んで、而して涙を堕さゞる者は其人必らず不忠、李令伯が陳情表を読んで涙を堕さゞる者は其人必らず不孝、韓文公が祭十二郎文を読んで涙を堕さゞるものは其人必らず不友と。予も亦之に倣ふて曰はんと欲す」（「うたかたの記」）と書くかと思えば、『浮雲』の中のすぐれた文章を指摘しようと、「『浮雲一行値千金、紙有爛光筆有音』とも称すべき絶妙なる句を摘挙せんに」という具合に、読者の教養をも勘考しているようにも思われる。その一方では、「世人多くは其名を知らざる釈秦冏の、『寒波受影明如鏡、一鳥分身上下飛』の句は」（「詩歌の精神及び余情」）というように「世人多くは其名を知らざる」ような例も少なくないようで、特に漢詩の引用は多い。このような教養は、恐らくヨーロッパ文学に親炙する以前、江崎塾に在籍中に、あるいは山田奠南宅での書生生活中に得たものであったろう。そしてこの教養が彼の文学観に影響を及ぼしていないとは言い切れない。既述の「浮雲の褒貶」における、型にはまった男女観や、あるいは「妹と背鏡を読む」における結婚観など、いずれも漢学によって身につけた先入観を切り捨てることができなかったことを示しているのであろう。

日本の文学に関する教養としては、『近代文学研究叢書』才二十四巻中の忍月の伝記の項に、「予備門では漢詩文や中古文学のほかにドイツ語を学び（後略）」と記されている。予備門で中古文学を学んだというのは、どのような資料に拠っているのか詳にしないが、忍月の評論にあらわれた限りでは、あまり影響は見られない。せいぜい詩歌を対象とする論において、和歌を引用している程度である。「枕草子」の一節の引用、「源氏物語」という名前などは出て来るが、論の展開に影響を及ぼすような重要な役割をになってはいないのである。むしろ、同じ和歌に関しても中世時代の文学観の影響が見られると言えよう。特に「幽玄」ということばに、中世歌論の影響の大きい点は、夙に久松潜一氏の指摘するところである。(注30) 久松氏によれば、忍月は「幽玄」ということ

Osaka Shoin Women's University Repository

ばの余情的性質と象徴的意義をといているとのことである。鷗外を納得させ、論破するだけの近代的定義を与えることができず、結局「之を分析する能はず、解剖する能はず。予は之を人々の黙会暗認に任せんのみ」と匙を投げてしまっているところに、その限界はあるとしても、忍月の詩歌論の基礎に「幽玄」という理念が存在することは否定できないであろう。

近世文学について考えれば、良かれ悪しかれ、忍月の評論に最も影響を与えているようである。確証はないが予備門時代に近世小説を愛読したのではないかと思われる。『小説神髄』が、これら近世小説を否定的に扱っているため、忍月も否定的な用例として近世小説ないし、近世の戯作者を挙げることが多いようであるが、必ずしも常に否定的ではない。「詩人と外来物」では、

予日本旧来の小説を見るに、其巧妙の著作と称す可きものは総て外来物応用の巧妙なるものなり。一九を見よ、三馬を見よ、西鶴を見よ、其磧京伝種彦を見よ。其傑作たる所以は外来物応用の巧妙なる所以に非らずや。

と言っており、不用意に本心をさらけ出したと見ることもできよう。

西鶴については、紅葉・露伴等に関連があるためと思われるが、数カ所で言及している。

思ふに著者は西鶴を愛し、西鶴を学ぶの人ならん（「新著百種才五号風流仏」）

と言い、あるいは「想実論」において、西鶴の文章の用例を出し、「詩美人に奉答す」では芭蕉、西行、近松……というように並べている。もっとも「想実論」中の「結論」において、

或人曰く、「近松は実に大詩人なり、西鶴などの及ぶべきにあらず、近松は西鶴等より数十等高大なる感念を有す云々」と。夫れ或は然らん。

と、近松を賞揚するあまり、「或人曰く」「或は然らん」と条件付きではあるけれども、西鶴を近松より数十等も劣るとしているような意見に賛成しているという無定見なところもある。西鶴に関しては、むしろ紅葉・露伴等に啓発されるところがあったのではないだろうか。

Osaka Shoin Women's University Repository

近世文学のうち、否定的な例としては、馬琴を挙げていることが多い。

人物を以て運命の一玩具と做し木偶雛人形と一般ならしめ、読者の感情を惹起すこと能はず。是れ馬琴為永等の著作が其達筆なるにも係らず、其欠点非難多き所以なり。（「浮雲才二の褒貶」）

馬琴の如きは好んで趣向の奇絶変幻を喜び、勉めて意表の事実、奇怪の境遇を出し、以て人目を眩せんとす。大は即ち大なりと雖も、是れ啻に小説の外面を大にするのみにして、毫も内面を大にするに由なし。（「国民新聞の談藪記者に質す」）

等である。為永春水も、

玉簾の如きは無理の多く且つ其構造陳腐のものにして、為永小本の趣向と大差あるを見ず。（「篁村氏の『むら竹』才一巻」）

と、悪い例として引き合いに出している。

忍月には、以上に見て来たような近世文学史に残る作品のほか、もっと通俗的な作品の影響も見られるのである。たとえば、「浮雲才二の褒貶」では、書き出しが、

忠義に禄の高下なしとの一言は真田幸村の口より出でゝ初めて価値あり。

となっており、末尾近くの、

名古屋の行台浅野長政太閤を罵りて狐憑となす。太閤の負嫌ひ猶ほ且つ之を放つ。

などという例は、あきらかに通俗文学から出ている。「忠義に……」の方はちょっと出典が思い浮かばないが、[注31]「名古屋の……」の方は『絵本太閤記』が出典であろう。（あるいは『真書太閤記』とも考えられる）[注32]評論ではないが、忍月の小説『惟任日向守』などには特に『絵本太閤記』による説話が利用されている。[注33]『絵本太閤記』は、いわば近代の大衆文学の源流として、それなりに評価のできる作品ではあるが、近代小説の出発点とも言える『浮雲』論評の比喩として用いるには、果して妥当かどうか問題であろう。[注34]

以上、極く表面にあらわれた若干の例から、忍月の文学観を形成する諸要素を取り上げてみた。もちろん、忍

Osaka Shoin Women's University Repository

月の文学観を形成しているのは、表面には現われていない、いわば氷山の水面下の部分に負うところが大きい。そしてまた当然のことながら、ドイツをはじめとするヨーロッパの文学によって、その骨格の相当の部分が成り立っていた。表面にあらわれているのは、大部分がこのヨーロッパ文学を中心とする文学観である。ここに忍月の本領があったと言うべきであろう。魯庵の回想によれば、「当時の批評は所謂穿ちや穴捜しや感想ばかりで、堂々の論陣を張ったものは殆んど無かった」「(忍月の批評は)鴎外出でざる以前独逸学派の一人舞台であった」(「紙魚繁昌記」)という。批評の方法は、多くレッシングに学んだのであろう。

忍月が「レッシング忍月」と諢名された所以を、魯庵は「矢鱈とラオクーンを引張出すので」と書いている。しかし、「矢鱈と」といわれるほどにはラヲコーンは出て来ないようである。あるいは印刷物ではなく、談話の際に多用したのかもしれない。(注35) むしろこういう諢名がついたとすれば、「レッシング論」の結びに、

現時我日本は恰もレッシング時代の独逸の如し。(中略)吾人レッシング氏を他邦人とは思はざるなり。否な才二のレッシングが吾邦に生ぜんことを希ふなり。嗚呼誰か吾文学界のレッシングたる者ぞ。

と、暗に忍月が日本のレッシングを自任していたことによるのであろう。

忍月がこの「レッシング論」を発表しているのは、明治二十二年三月二十二日の、『国民之友』才四十五号である。この「レッシング論」以前に、忍月は「ゲエテー論」を発表している。(注36) 明治二十二年三月といえば、まだ鴎外は文学活動を開始していないと言ってよく、忍月と並称される魯庵が、やっと評論活動に入った時期であった。(注37) この時点ですでに二つのドイツ文学に関する評論を展開し得たところに忍月の強みがあった。(注38) 従って忍月の評論を検討する場合、ヨーロッパ文学との関連はその中心となると言えよう。

(未完)

以上はまだ調査不足の部分もあり、筆者の覚え書きに過ぎない。続稿では、調査不足の部分を補うとともに、ヨーロッパ文学と忍月の評論との関係、さらにこれらをもとにした忍月の文学観、および忍月の小説と文学観との関連などについて考えてみたい。

Osaka Shoin Women's University Repository

（注1）『石橋忍月評論集』（岩波文庫　昭14）の「解説」（石橋貞吉）には「明治十九年頃から、月の舎しのぶの名で『女学雑誌』に伝記・雑文の類を寄稿してゐたが」とあるが、月の舎しのぶは巌本善治であることが、幾人もの先学、最近では青山なを氏（臨川書店刊『女学雑誌』解説）や十川信介氏（『近代日本文学』才7集「文学と自然――想実論をめぐって――」後注）等）によって指摘されている。

（注2）『石橋忍月評論集』「解説」には「忍月の情熱的な批評活動は、大体明治二十四年までで終つてゐる。それ以後は惰性に過ぎないとも言へる」とあり、以後の研究は概ねこの説を踏襲している。稲垣達郎氏は「長崎時代の社会評論にも、また見るべきものがある」（講談社『日本現代文学全集』才八巻「斎藤緑雨・石橋忍月・高山樗牛・内田魯庵集」作品解説）とつけ加えている。

（注3）明治廿六年十二月廿五日内務省許可・明治廿七年十月廿六日印刷発行　発兌元　博文館

（注4）谷沢永一氏の指摘（『大正期の文芸評論』研究史覚書）にもあるように、文芸評論が文学史的評価を与えられるようになった時期が、明治末期であった。このことが忍月に対する評価にも、当然影響を与えているにちがいない。大和田建樹の『明治文学史』でも、引用されている忍月の文章が『露子姫』の一部であることは注意すべきであろう。

（注5）明治三十九年八月四日発行　発行所　開発社

（注6）博文館発行『太陽』才拾五巻才参号。明治四十二年二月廿日発行
この特集号は才一編より才七編にまで分類され、その才三編が「小説及び評論壇」となっており、その才九節に「評論壇の大勢」と題した一節がある。

（注7）明治39年12月刊の初版は未見。明治42年5月刊行の増訂版（ただし昭和2年修文館書店復刻）を参照した。

（注8）昭和11年10月　至文堂発行　昭和27年5月改訂版　才四篇才二章三の一「石橋忍月の立場」・二「幽玄論」・三「罪過論と運命論」

（注9）たとえば、ごく最近まで、忍月の伝記はすべてがこの解説によっていた。明治書院発行『現代日本文学大事典』（初版昭和40年11月30日）の「石橋忍月」の項（長谷川泉氏執筆）もこれによっていると思われる。
また、匿名の評論にも「予の変名」などと忍月自身の書き入れたスクラップがある由で、匿名評論で忍月の執筆と確認できたものがいくつかあることなど。

Osaka Shoin Women's University Repository

ただし、忍月の書き入れのあるものをテキストにした場合もあり、初出と本文に異同のあるものがあることは問題であろう。しかし、以後の忍月論の殆どが、この評論集を底本にしているようである。

(注10) 明治三十二年九月廿五日発行　発兌元　博文館

なお、魯庵にはこれ以前に『文学一斑』（明治二十五年三月一日　博文館）、『文学者となる法』（三文字屋金平述となっているが、奥付は著作兼発行者　宮沢俊三となっている。今日では魯庵の著作であることは明らかになっている。明治二十七年四月十五日　右文社）等の著述があり、従って評論集も出し易い条件にあったと考えられる。しかし、やはり高山樗牛の出現などで、明治三十年代という時代が評論集の刊行を可能にしたのであろう。鷗外の『つき草』、逍遙の『文学その折々』も、ほぼこの年代に近い。

(注11) 臨川書店より複製版が刊行（昭和四十一年十二月～四十二年三月）されているので簡単に読み得るようになった。

(注12) 明治文献より復刻版が刊行（昭和四十一年　月～四十三年　月）されている。

(注13) 『石橋忍月評論集』解説には、三十二種のペンネームが記録されている。

(注14) 『石橋忍月評論集』は四十五篇の評論を収録している。しかし、これが忍月の評論の全部ではない。かなり重要な評論も落ちている。（たとえば、いわゆる「舞姫論争」の『舞姫再評』以下など。）

忍月の著作の全貌は、昭和女子大学『近代文学研究叢書』第二十四巻のうち、「石橋忍月」（二、資料年表）に、ほぼ完全といえる形で、見得るようになった。

(注15) 饗庭篁村『むら竹』、嵯峨の屋御室『くされ玉子』等。

(注16) 前掲『日本文学評論史　近世近代篇』の中で、

石橋忍月はドイツ文学を基礎として主として国民の友に拠つて縦横の論評を振つたのであつて、福州学人と号して同誌に批評の筆をふるつたのも氏であるといふ。

とある。つまり忍月または福州学人と署名のある論のみが取り上げられていることになる。

(注17) 『日本文学評論史』では、「国民の友によつて忍月と署名のある評論を拾つて見ると」とあり、「石橋忍月と文学評論」では、「忍月の文学評論についてはかつて考察したこともあるが、その後昭和十四年に石橋貞吉氏によつて石橋忍月評論集も刊行され、その主なる文学評論がまとめられたのでそれを通読して多少附加へたい点もある」となってい

Osaka Shoin Women's University Repository

て、後者では評論集未載の評論にはふれられていない。

(注18) 内田魯庵『紙魚繁昌記』(書物展望社　昭和18年改版による)「病臥六旬」(5)「石橋忍月の憶出」なお、『石橋忍月評論集』解説には

文学史家に依れば、忍月の評論の特徴は、その井然たる論理性に在つたとされているが、その点では忍月は寧ろ不得意(後略)

とある。

(注19) たとえば、「幽玄」ということばを忍月は結局、

之を分析する能はず、解剖する能はず。予は之を人々の黙会暗認に任せんのみ。

と投げ出している。鷗外はこれに対して、「忍月を信ずる人は一詩成るごとに、往て這裏に幽玄ありや否やと問ひ、其折紙を領し来れ」とからかっている。

谷沢氏は、

彼の評語は、彼にとつて、本来、敷衍・展開することのできないものであつたと考えざるを得ない。(中略)文学批評上のテーゼの学習と記憶に急であり、且つ、そのような学習と記憶との能力が、具体的な適用の能力とは異質であることに気づき得なかつた忍月の、必然的におちいらざるを得なかつた錯誤である。

と手きびしいのに対し、関守氏は、

鷗外は(中略)幽玄についての忍月の説明が不十分だと言ふが、誰にしても幽玄を簡潔に説明し得るものではあるまい。(中略)鷗外にしても、自分の使つた「幽玄」の語について一々説明を求められたら困るのではないか。

と、忍月の弁護にまわっている。

(注20) 『日本現代文学全集』(講談社)才八巻「斎藤緑雨・石橋忍月・高山樗牛・内田魯庵」(昭和42年11月)に「作品解説」(稲垣達郎)、「入門」(瀬沼茂樹)がある。なお、これに付属している「参考文献」「年譜」等は便利である。他に『現代日本文学講座』(三省堂)才八巻「評論・随筆Ⅰ」および『人と作品現代文学講座』(明治書院)才一巻「明治篇Ⅰ」にそれぞれ忍月関係の本文・注釈・解説が収められている。

(注21) 「わが家の百年——批評家、高等官試補に失落す——」(『中央公論』昭和42年3月号)

Osaka Shoin Women's University Repository

「明治の文学者の一経験」（『季刊芸術』創刊号　昭和42年4月）

「内務省時代の忍月」（『日本現代文学全集』才八巻月報）

（注22）注18と同じ『紙魚繁昌記』

（注23）『国民之友』明治21年12月21日

（注24）忍月が寓意・諷誡をどのように考えていたかについては、谷沢氏の前記「石橋忍月の文学意識」にくわしい考察がある。

（注25）その理由として、忍月自身は、

　此書書も世人の愛読を受くるも、未だ是非の点をほじくり出し、以て純然たる批評を下したる者あるを聞かず。いでや忍は是より横鼠負心と阿諛主義とを去り、公平無私の眼を以て、之れが批評を下さんと欲す。

と書いている。「横鼠負心と阿諛主義とを去り」ということばからも、忍月が逍遙に私淑していたことがわかる。その逍遙の作品であったことや、他に近代的な作品がまだ殆ど現われていなかったことなどが、『妹と背鏡』を取り上げた主な理由と言えよう。

（注26）『我楽多文庫』非売本表紙の右下部に「一字千金」という文字が印刷されており、また公売本才一号の「硯友社々則」の中には「潤筆は一字につき千金づゝ申受候」とあり、いずれも硯友社文学の遊戯的な性質をあらわすものとして、非難されることばである。忍月の場合、多少使い方はちがうかもしれないが、なお硯友社を連想させることばであることを否定できないであろう。

（注27）忍月についての同時代人の回想は、前記内田魯庵の『紙魚繁昌記』以外には殆どない。むろん評論家としてデビューする以前についての回想の類は全く見当たらない。

（注28）『日本現代文学全集』才八巻所収。

（注29）山本健吉氏の「批評家、高等官試補に失落す」（『中央公論』昭42・3）には、

　少年時代に、忍月は久留米の江崎塾に、漢学を学んだ。江崎済（号巽苔）の門に入ったわけである。忍月にかぎらず、当時の人の教養の根本は儒学である。（中略）

　忍月は明治十五年に上京、十六年九月に、東京大学予備門に入学した。儒者山田奠南の家に書生をして、苦学しなが

Osaka Shoin Women's University Repository

ら予備門から大学へ通った。（中略）

母が私に、「お父さんは月四円しか祖父さんに送って貰えなかったので、学資かせぎに、原稿を書きなさった」と言ったことがある。（中略）養元がそれだけの仕送りしかできなかったとは、ちよっと考えられない。むしろ男子一たび郷関を出ては、石にかじりついてでも、自力で苦しんで志を貫けという、きびしい考えがあったのだろう。忍月は独法科に学び、ドイツ語の原書を読むうちに、レッシング、ゲーテ、シラー等の文学によって、目を覚されたのである。

と書かれており、年譜も恐らくこれに拠ったものであろう。

なお、学資稼ぎに原稿を書いたとすれば、上京後、「妹と背鏡を読む」を発表するまでの期間がやゝ長すぎるし、また「浮雲の褒貶」までの期間もあき過ぎている感じである。もし学資稼ぎだとすれば、山本健吉氏の、

「湯島三組町　石橋忍月」と署名しているが、当時は愛南の家を出て、大学に近い湯島あたりに注んでいたのだろうか。

という指摘と関連があるのではないだろうか。書生として住み込んでいるのと下宿しているのとでは、生活費に大きな差が出て来るであろう。学資稼ぎのために評論を書き始めたとするならば（むろん文学的な興味に触発された部分も大きいにちがいないが）、「妹と背鏡を読む」の

忍はこれより横暴負心と阿諛主義とを去り、

ということばや、「浮雲の褒貶」の

予は浮雲の著者よりアイスクリームの贈与を辱ふせしと云ふ訳に非ず、又葡萄酒一ダースを頂戴せしと云ふ訳に非らざれば、素より批評する義務もなければ褒貶するの責任もなし。

という断わり書きは、忍月の屈折した心情表現とも理解できよう。

（注30）『国語と国文学』才26巻才1号「石橋忍月と文学評論」

（注31）講釈の種本によるものであろうか。「難波戦記」あたりではないかと思われる。

（注32）『真書太閤記』には『絵本太閤記』の説話の大部分がうけつがれている。

（注33）別に続稿で論じる予定であるが、『絵本太閤記』で作られた説話をもとに、光秀の論評を行なう忍月の態度には、方法

Osaka Shoin Women's University Repository

上の問題が残る。

（注34）もっとも、たとえば鷗外の評論などにも、

木下藤吉郎の所行は時に借倒しの口実となり（「今の批評家の詩眼」）

という例があり、このような表現は当時としては異とするにたりなかったもののようである。

（注35）忍月自身の書いたものでは、

女学雑誌記者は吾人の評論を目して「ラヨクーン（ラヨコーンか）めきて講釈いつも乍ら大層なり」と言ひ、以て竊に吾人を誡めたり。（「戯曲論」）

と、暗にラヨコーンをふりまわすことを認めている。

（注36）明治22年1月に「小説論」、「洋箏断絃」、3月に「平仄に就きて」（以上『読売新聞』に掲載）を発表しているだけである。

（注37）明治21年10月「山田美妙大人の小説」以下、22年3月までで計七篇の評論を発表している。

（注38）魯庵も「スウヰフト伝」（『女学雑誌』明治22年2月）を発表しているが、「其一」だけで終わり、しかもこの段階ではただ略歴を記したに過ぎない。